9月分市況報告書　　報告者　中島良晴

調査日　群馬県森林組合連合会共販所　9月4日

台風10号がグズグズして大雨を長い間降らせたおかげで、家の外に出ると体に圧力を感じる
程の暑さが一段落して、夜はちゃんと温度が下がり虫の声を聴く余裕が出てきた。
新米の収穫を目前にして、米不足が叫ばれている。 確かに昨年は1等米が極端に少なく
米業者の在庫も少ないのだろうが、収穫目前の米不足騒動は、今年の収穫も期待できない
だろうという不安からの”囲い込み”だろう。 過去の例を見ても米をめぐる不安と言う物は、発端は
憶測の不安が連鎖し、様々な業界に影を落とす。 消費量が少なくなったとは言え
まだまだ我々は米の出来高で様々な影響が出る”米食民族”なんだなぁ と思う。
仮にウクライナの小麦情勢が悪化した事で、日本人の不安を醸し出す程にはならない。
　今日の県森連の入札は、高崎木材市場の市売りと重なってしまったので、買い方は
皆早々に札だけ入れて、高崎木材市場の方へ行ってしまい。13:00時の締め切り時点では
誰も残っていない有様だった。 あちらは”口競り”なので、その場にいないと参加ができない。
良く魚市場などで見る”競り子”の名調子だ。 景気の良い時は活気が有って良いが
そうで無い時は、「はい、次はこの製品です。」と言っても押し付けられるのを嫌って誰も近づかない
事もある様だ。 しかしこちらは、虫害の心配もなく 既に製品になっている物に値を付けるのだから
安心して買える。しかも 米材・欧州材・南洋材など選り取り見取りある。
輸入材が丸太で国内に入ってきたのは、昔の話で、今は一部を除き製品でなければ輸入できない。
　原木の方は夏場の市なので入荷は少なく、県森線の前回市では260㎥程度の出荷で落札率も
63％程度と何とも低調であるが、この辺りが夏場の原木市場のまっとうな姿だろう。
今回は370㎥程度だが内容は欠陥材が多く、売れ残りが多く入っている。
実際に新規入荷した材も、山土場の残りと言った所か？
当然値段も安く、中々力の入らない価格だが、県森連の市況はこんな時でも参考になる欄がある。
一番右端の”落札率”がそれである。 但し販売量と共に見る必要がある。 例えば落札率100％
であっても、1本・2本だと当てにはならない。
今市場で動きがあるのは、3.0m中目材（20～28cm） とヒノキの中目材　それと100％に達してないが
ヒノキの4Om　16～20cmは品薄の筈である。土台用の丸太で、品薄が続いている。
スギ・ヒノキ共に4.0m太丸太はあまり売れていないように見えるが、土場に並んでいる物を見れば
「なるほど・・・」と言う代物である。 目の詰んだ太物を好む買い方も居るため、良い物は1回の市で
姿を消す。残った物が溜まって、4.0m材が不調に見える訳だ。
◎榛名県有林の山土場入札に触れよう。
県森連が請け負ったが1回では売れず、3回の市を行った様だ。7月の報告書にも書いたが、この時期の
山土場入札はスピード勝負である。 だが懸念した通り　仕分けが悪い（オジヤとも言う）・時期が悪い
に加えて入札指値が高すぎた様だ。しかも3回も行っているにも拘らず。指値は最初の設定のまま変更
ができないとの事、今後の課題としては　伐る時季の検討・**仕分けの研究**・指値の設定の仕組み
などだろう。古くなって虫害が進んだ物が、そのままの値で売れる訳が無い。国有林は総額指値もする
仕分けについては森林組合であれば、かなり細かい仕分け指示に応えられるだけのスキルを持っている
筈である。**指示する方の勉強が必須**である。太さと長さを熟慮する事で、生産した材積まで変わる。
契約により、県森連が買い取った3回目の残材については、かなり高価な燃料になるしか無さそうである。

調査日　素材生産協同組合　9月9日

今日の素生協の市は、1541回目で開設46周年の記念市という事だった。
式典は早々と執り行った様だが、市の方は閑散としていた。
土場に椪積されている物件を見ても、生産計画に従って出荷されている国有林材がほとんどを占める程で、民間材はほとんど無い。　市場内の通路も広々としていて、未引取の椪ばかりが目につく。
かつての盛況ぶりを知る者にとって、お昼に頂いたアユの塩焼きが僅かに昔との繋がりを思わせる。
46周年の記念式典会場であった入札室にも人影は無く、入札結果を聞くのは私の他は隣接する県産材加工協同組合の女子事務員さんだけだった。
今月の県森連の報告でも述べているが、虫害が懸念される今の時季の市場の景色としては、本来ならまっとうな風景と言えると思う。 ここまで虫害ばかりを取り上げてその懸念を訴えてきたが、実は今の時季の伐採を避けた方が良い因子は他にもある。　丸太の動きが止まっている背景はどうあれ、こんな時なればこそ、木材の伐採時期について熟考する機会であると思う。
　まず虫害についてはこれまで何度も述べてきたので、その他の事について考えてみたい。
　まず　木材も植物であり生きているので、厳冬期と今の時季では生物としての生理が全く違う。
つまり　木材と言う素材として見た時、厳冬期の物と盛夏期の物とでは材質的に別物と考えられる。
　これが野菜などの農作物であれば”旬”と言う物で、数十年も厳冬期と盛夏期を繰り返してきた木材にも当然当てはまるのである。
　具体的に言えば、厳冬期には木材は体内の水分を極力減らし樹液の濃度を高くしてて、寒さに備える。
これが出来ないで、濃度の薄い水分を沢山含んだまま冬を迎えると、水分が凍結して細胞が破壊される。
樹液の濃度を上げていても、ある程度凍ることは避けられないのだが、芯まで凍ってしまうと、辺材の部分は芯材の凍結による膨張に耐え切れなくなって、一瞬で縦に大きく割れてしまう。これを凍裂と言う。
木材として一番価値のある部分が縦に裂けてしまうので、深刻な被害である。
　一方で盛夏期の木材はどんどん水を吸い揚げて、葉に供給し気化熱で放熱しなければ、葉や枝先は煮えてしまう。 夏場に日向に放置した水道ホースから最初は熱湯が出てくる、アレである。
その反面光合成を効率よくできるように、表面積が多くなるように進化しているから尚更の事である。
この時の材質は樹皮の下の形成層では、盛んに年輪の隙間の柔らかい部分が形成されている。
虫害を起こす虫たちも、この時期を狙って卵を産み付ける。
対して厳冬期の木は、体の中の水分をどんどん減らして、樹液濃度を上げ成長を抑えている。
この時、樹皮の下の形成層は年輪の硬い部分を形成している。
　同じ材を使って製材品を作る時、水をブヨブヨに含んだ柔らかい素材を製材して、10％程度の含水率に落として行くのはコスパが悪い、しかも収縮率が大きいため、狂いが大きい。
これに比べて元々含水率を最小限に落として、表面の硬い層を作っている時期の木材はどうだろう。
乾燥も早く、狂いが少ない。 虫害も付け入りにくい。 生きたマツなど、脂の多い木は間違えた時期に孵化した幼虫などは松脂で包んで固めてしまう。その為 マツノマダラカミキリ はマツノザイ線虫を感染させ、あらかじめ導管を塞いで樹脂の流れを止めた上で産卵するのだ。
伐採する季節に拠って、同じ木でも木材としての性能は全く別物になるという事だ。